

令和 5 年 5 月 14 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12278

研究課題名(和文) 占領期(1945-1949)の単行本検閲の実態 出版社鎌倉文庫を起点として

研究課題名(英文) Elucidation of the censorship of publications by GHQ/SCAP - in Kamakura BUnko's case

研究代表者

尾崎 名津子(Ozaki, Natsuko)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：10770125

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間内に実施した研究：GHQ/SCAPによる占領期に創業した出版社・鎌倉文庫の活動と、当時の検閲に関する一次資料の調査から、占領期の単行本出版と検閲それぞれの実態と両者の関係性を明らかにする試み。
その成果の概要： 鎌倉文庫から刊行された単行本の全体像が把握できた。調査の過程で坂口安吾の著作の新資料を発見した。研究の方法論として、地域性に着目した展開が必要だと明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：敗戦直後の文学活動における、戦前・戦中のそれとの連続性と断絶する部分とを具体的に解明できることが示された。また、文学研究、出版研究等における単行本の取り扱いや、意義付けのための方法論において研究の展開の余地があることが示された。

社会的意義：占領期の社会や文化の実態を解明する際には、国内は当然ながら海外に現存する資料も併せて活用する必要があることを実証的に示した。また、言論統制に対する出版社、編集者、作家の対応の様相も具体的に示すことが可能になった。

研究成果の概要(英文)：Research conducted during the research period: An attempt to clarify the actual situation of monograph publishing and censorship during the occupation period and the relationship between the two, based on a survey of the activities of Kamakura Bunko, a publishing company founded during the occupation by GHQ/SCAP, and primary documents related to censorship at the time.

Summary of results: (1) An overall picture of the monographs published by Kamakura Bunko was obtained. (2) In the course of the research, new materials on Ango Sakaguchi's writings were discovered. (3) It became clear that the methodology of the research needed to be developed with a focus on regional characteristics.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：鎌倉文庫 GHQ/SCAP検閲 編集出版 単行本 坂口安吾 プランゲ文庫 相補性 編集者

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本における言論統制の研究は、法制史の分野で推進されてきた。一方、2000年代以降、国内では内務省検閲に関わる一次資料が新たに発見、ないしは整備され、研究などの利用に供せられる状況が用意された。研究代表者はその資料整備に直接関与した経験があり、その過程で、雑誌新聞等の逐次刊行物への検閲に対する研究が充実している一方、単行本出版と検閲の関係を問う研究が必要であることに気づいた。

(2) GHQ/SCAPによる検閲の研究もまた、上と同様2000年代以降大きな進展を見せていた。これもまた、歴史学やインテリジェンス研究の観点から進められていた。文学研究においても、検閲の一次資料を根拠にした研究が進みはじめたが、いずれもやはり雑誌を中心としたもので、単行本や出版社、出版という営為そのものに目が届く研究が必要だと思われた。

(3) 占領期の出版や文学、殊に文学作品や作家の営為に関する研究は、従来から充実していた。占領期の文学の状況を研究する際に、作家がいわば「食い扶持」としていかなる活動に依存したかを考えると、たとえばカストリ雑誌への寄稿や戦時中に一度休刊した雑誌新聞が一挙に復活し、それへの寄稿を精力的に行うなど、メディアの状況と相関関係があることは明白である。そのなかでも、作家たち自身が出版社を興したという稀有な例として鎌倉文庫という会社がある。鎌倉文庫は占領期に創業し、また、占領期のうちに廃業している。この会社の命運を辿りつつ、実際にどのような出版事業を展開したのかを具体的に明らかにしていくことが、占領期の文学、文化、社会の実態を解明することにつながると考えた。

2. 研究の目的

(1) 占領期の文学状況について、出版社の観点から把握すること。文学研究は作品の緻密な読解や作家の伝記的事実との往還によってのみ行われるのではない。また、掲載媒体を起点とした研究も広く行われているが、そこには経営体としての出版社における、事業としての文学作品の出版という観点を重く取り入れる余地がある。

(2) 占領期検閲の実態について、特に単行本への検閲を明らかにすること。新聞や雑誌という速報性の高いメディアは、その時代そのものの様相を直接的に示すものであるが、単行本は編集や販売上の戦略が綿密に、如上のメディアに比して時間をかけて検討されるところがある。また、執筆に時間を要することもあり、戦前や戦時下において既に発表された文章・作品のリサイクルを行う向きも強い。故に、単行本への検閲を明らかにすることは、戦前と戦後とにおいて継承された内容と再編、切断された内容とを計ることを可能にする。

(3) 占領期の出版社や編集者、作家が、検閲と折り合いを付けながらいかなる活動を展開していたのかを、実証的に明らかにすること。同時に、検閲する側が、出版する側の様態をいかに、どの程度把握し、どのような方策を立て、遂行していたかを明らかにすること。これらを以て、両者の相補性を明らかにすること。両者はそれぞれ独立、分離していたのではなく、相互に影響を受けながら日々展開されていたのであり、その様相の実証と解明に寄与することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 鎌倉文庫は占領期早々に創業され、占領期の後半(1949年)に業務を八雲書店に委託し、経営体としての役目を終えた。この会社の動静は、経営に関わった作家や編集者たちの証言によって既に明らかになっている部分もあるが、同時代の出版のこと自体を扱った出版物(『出版情報』や『出版文化』など)や、会社の外部から鎌倉文庫がいかに語られているかを調査し、その特色を明らかにする。

また、鎌倉文庫の出版物のうち、単行本の出版に焦点を当てる。総目録がないため、これを作成する。そのために、国内各地の図書館、文学館で単行本の現物を閲覧し、データ収集するほか、自身で古書を購入し、手元に収集する方法も採る。鎌倉文庫は作家たちが経営していたことから文学出版に関心が向きがちだが、実際には文学以外の単行本も多数出版しており、それらの間に優劣をつけず、網羅的に把握する。

(2) 占領期検閲については既に厚い研究の蓄積がある。それらが明かしたところを継承しつつ、メリーランド大学図書館プランゲ文庫所蔵の一次資料(検閲関連文書、単行本の現物)の調査を行い、現存する文書の特質を明らかにする。鎌倉文庫の出版物についても全て閲覧し、データ収集する。

(3) 研究代表者はこれまで内務省検閲における、検閲する側とされる側との相互交渉的な側面に注目し、研究を進めていた。作家、編集者、モノとして残っている単行本に残された検閲の痕

跡、検閲官などの手による一次資料の調査と分析などによってである。この方法は占領期検閲においても同様に有効である。本研究ではさらに、GHQ/SCAP という統治機構における検閲という点に注目しつつ、書き手と検閲する側の相補性を考察する。

4. 研究成果

(1) 企業としての鎌倉文庫の脆弱性は、従来その経営にいわば「世間知らずな」作家たちが関わってきたことを根拠とされる向きがあった。しかし、本研究によって、そもそも起業の段階でヤミ物資を消費することが目的化していたこと、経営にその物資の提供者が関わっており、健全な経営が見込めなかったため、途中で内部再編（提供者と深い関係がある者の追放など人事異動）が起き、その結果、出版物の流通や出版物を製作するための物資に関わる部分で力を維持することができなくなり弱体化したこと、その弱点を強化するために採った方策が有効でなかったこと、日本国内の経済情勢の不安定さを直接的に被り、それを乗り越える力に欠けたことが明らかになった。

(2) 鎌倉文庫の単行本目録を作成し、国際誌『跨境 日本語文学研究』で発表した。同誌は日本語の媒体として初めて SCOPUS に搭載された。それゆえグローバルに成果を報告することが可能になった。公表後、イギリスやインド等から問い合わせを受けている。また、目録作成の過程で、占領期の出版における北海道という土地の重要性が明らかになった。鎌倉文庫は創業 1 年目の後半から、東京だけでなく札幌でも事業を展開していることが、単行本の現物の奥付から明らかになった。札幌で印刷・製本されたバージョンがあることは既に指摘されていたが、その開始時期は既存の研究の指摘よりも早いことが実証された。さらに、刊行点数も従来の指摘よりも実際には多いばかりでなく、東京で印刷・製本された単行本とは一切関わらない独自の出版企画があったことが解明された。

(3) メリーランド大学での調査の結果、検閲関連文書の作成地に偏りがあることが明らかになった。具体的には、九州（福岡。GHQ/SCAP の区分で言えば District ）で作成された文書が相当数残っており、時期的にも継続性が認められた。東京で作成されたと思しき文書も多く残っているが、揃っていないものや時期が明確でないものがあり、行政文書を経年的に把握することは不可能である。この成果によって、研究代表者は次の研究の展望を得ることが可能になった。たとえば、作家の井上光晴が占領期に長崎で特色ある出版を編集者として行っていた事実が明瞭になった。しかし、これは鎌倉文庫の研究そのものからやや逸れるうえに、これに付随する調査や検討・考察に十分な時間を取れていないため今後の課題とし、現在は次の科研費の研究課題の中に取り込み、継続して追究している。

(4) メリーランド大学所蔵の鎌倉文庫の出版物のうち、高見順『今ひとたびの』の特異性が解明された。単行本『今ひとたびの』は鎌倉文庫と他社からも刊行されていたことがわかった。ほぼ同時期に同じ本が出版されたことになる。この事情について文献資料から明らかにしつつ、現物としての単行本も精査し、2冊の関係を明らかにした。また、その結果、占領期の単行本出版における、出版社と作家との権利関係をめぐる混乱が浮き彫りになった。

(5) メリーランド大学での調査の過程で、坂口安吾の歴史小説に関して興味深い資料を発見した。『二流の人』という作品の原稿とその検閲のために必要な一連の文書で、研究代表者はそれらの資料が示すものを特定し、坂口安吾研究者の助力を得て共著論文を発表した。なお、原稿ではあるが安吾本人の筆跡ではなく、編集者の手によるものと判断した。これらのことから、戦時中の作品が戦後において検閲を受け、いかに書き換えられ、単行本として再編されるかということを示す一つのモデルケースを示すことができた。

(6) 秋田雨雀、石坂洋次郎など、鎌倉文庫とは関わりがなかった作家の占領期の活動について研究を重ね、鎌倉文庫の営みを相対化することを試みた。占領期の作家たちの活動は依然中央（東京）が中心だとはいえ、当時は多くの作家が未だ疎開先に点在しており、それぞれの土地で作家としての役割を果たしてきた。その中には当地における出版活動も含まれるのである。

(7) 占領期検閲の調査方法や、占領期の資料を扱いつつ研究することについて、その重要性を説くことを目的とした活動も行った。学術雑誌だけでなく地域の広報誌や出版社の PR 誌などにおけるエッセイの執筆がこれに該当する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 尾崎名津子・大原祐治	4. 巻 82
2. 論文標題 メリーランド大学ゴードン・W・ブランゲ文庫所蔵・坂口安吾『二流の人』（九州書房版）関連資料に見る本文生成の過程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 昭和文学研究	6. 最初と最後の頁 82-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50863/showabungaku.82.0_120	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 尾崎名津子	4. 巻 11
2. 論文標題 鎌倉文庫の単行本出版目録	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 跨境/日本語文学研究	6. 最初と最後の頁 244-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.22628/bcjjl.2020.11.1.235	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 尾崎名津子	4. 巻 41
2. 論文標題 高見順『今ひとたびの』の諸本 メリーランド大学ブランゲ文庫所蔵本を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 弘前大学国語国文学	6. 最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 尾崎名津子	4. 巻 42
2. 論文標題 アメリカで日本文学研究を考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊『弘前』	6. 最初と最後の頁 45-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾崎名津子	4. 巻 7
2. 論文標題 敗戦直後の青森県内の言説状況 占領期の『月刊東奥』と石坂洋次郎の役割	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地域未来創生センタージャーナル	6. 最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 尾崎名津子	4. 巻 45
2. 論文標題 占領期の北海道における出版ブーム 鎌倉文庫北海道支社の活動	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 いずみ通信	6. 最初と最後の頁 15-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 金ヨロン、尾崎名津子、十重田裕一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 221
3. 書名 「言論統制」の近代を問いなおす 検閲が文学と出版にもたらしたもの	

1. 著者名 郡千寿子、仁平政人	4. 発行年 2019年
2. 出版社 弘前大学出版会	5. 総ページ数 424
3. 書名 青森の文学世界 北の文脈 を読み直す	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------